故郷(2)

魯迅
竹内好 訳

明くる日の朝早く、私は我が家の表門に立った。屋根には一面に枯れ草の※やれ茎が、折からの風になびいて、①この古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を説き明かし顔である。いっしょに住んでいた親戚たちは、もう引っ越してしまった後らしく、ひっそり閑としている。自宅の庭先まで来てみると、母はもう迎えに出ていた。後から、八歳になる甥のホンル（宏児）も飛び出した。

母は機嫌よかったが、②さすがにやるせない表情は隠し切れなかった。私を座らせ、休ませ、茶をついでくれなどして、すぐ引っ越しの話は持ち出さない。（中略）

「一、二日休んだら、親戚回りをしてね、そのうえでたつとしよう。」と、母は言った。

「ええ。」

「それから、ルントウ（閏土）ね。あれが、いつも家へ来るたびに、おまえのうわさをしては、しきりに会いたがっていましたよ。おまえが着くおよその日取りは知らせておいたから、今に来るかもしれない。」

このとき突然、私の脳裏に③不思議な画面が繰り広げられた――紺碧の空に、金色の丸い月が懸かっている。その下は海辺の砂地で、見渡すかぎり緑のすいかが植わっている。その真ん中に、十一、二歳の少年が、銀の首輪をつるし、鉄の刺叉を手にして立っている。そして、一匹の「※チャー」(猹)を目がけて、ヤッとばかり突く。すると「チャー」は、ひらりと身をかわして、彼の股をくぐって逃げてしまう。

この少年がルントウである。彼と知り合ったとき、私もまだ十歳そこそこだった。もう三十年近い昔のことである。その頃は、父もまだ生きていたし、家の暮らし向きも楽で、私は坊ちゃんでいられた。

※やれ茎…折れ、しなびた茎。
チャー…アナグマに似た動物とされる。猹は魯迅の造字。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「この古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を説き明かし顔である」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア もう「私」の親戚が引っ越してしまったことが、家屋からわかるということ。

イ 家を明け渡さねばならないわけが、家屋の様子からわかるということ。

ウ 心情の変化のために、故郷の屋根の見た目も違って見えるということ。

〔　　〕

(2) ——線②「さすがにやるせない表情は隠し切れなかった」とあるが、このときの母の心情として適当なものを選びなさい。

ア 故郷が変わってしまったことを、つらく感じている。

イ 「私」に、引っ越しを打ち明けることをためらっている。

ウ 住み慣れた家を離れなければならず、せつなく思っている。

〔　　〕

(3) ——線③「不思議な画面」が具体的にえがかれている箇所の最初と最後の三字を答えなさい。ただし、句読点も字数に含む。

□□□～□□□